

2014 年度 白梅学園大学大学院博士課程 学位審査報告書

学籍番号： B0H001氏名： 阿久津 仁史

学位の種類： 博士（子ども学）

学位論文題目： 多重知能理論を踏まえた中学生の特性と英語語彙学習方略の関
係

論文審査委員： （主査） 無藤 隆
佐久間 路子
小林 美由紀
白川 佳子（共立女子大学）

1. 論文内容の要旨

第一部 問題と目的（第Ⅰ章～第Ⅲ章）

第Ⅰ章では、Gardner(1999)が提唱した多重知能理論（以下 MI 理論）では、人間の知能特性を(1)言語的知能 (2)論理・数学的知能 (3)音楽的知能 (4)空間的知能 (5)身体・運動的知能 (6)対人的知能 (7)内省的知能 (8)博物的知能 の8つに分類している。学習者の実態に即した教授方法が十分になされているとは言えない現状に対する対策として、学習者の個人差把握の一助となると考えられる MI 理論を概観し、教育現場にいかに応用するかを探った。第Ⅱ章では、①適性、②学習スタイル、③学習方略、④動機と MI 理論との関係が深いと考えられる知的能力を取り上げ検討した。第Ⅲ章では、学習者の実態に即した効果的な英語学習のために、日本の英語学習における学習方略と語彙学習方略を概観し、MI 理論に基づく学習者の特性と語彙学習方略の関係を明らかにする先行研究を探った。第Ⅳ章では、本研究の3つの目的として、①MI 理論を拠り所とした中学生の特性を明らかにするための質問紙の検討、②中学生の語彙学習方略の差を明らかにするための質問紙の検討、③中学生の特性を考慮した語彙学習法を取り入れた実験授業を通して、中学生の特性による語彙学習方略の効果の差を検討することを述べ、本研究の構成を示した。

第二部 多重知能理論を踏まえた中学生の特性と英語語彙学習方略のとの関連の検討（第Ⅴ章～第Ⅹ章）

第二部は6つの研究からなる。第Ⅴ章（研究1）では、MI 理論に基づく Christison(2005)と Armstrong(2000)の質問紙を組み合わせ、東京都の5つの公立中学校の生徒を対象に質問紙調査を行い、中学生の特性を測る質問紙の信頼性と妥当性を検証した。その結果、十分な妥当性と信頼性が確認された。第Ⅵ章（研究2）では、先行研究を参考に、従来の英語学習法を学習者の特性によって分類し、それを踏まえて、英語学習法に対する学習者意欲と特性との関連を検討した。その結果、自らが取り組んだことのある英語学習法に再び取り組みたいかどうかという意欲には、学習者の特性によって差があることが明らかになった。

た。例えば、音楽特性能を活かした英語学習法として分類した英語の歌は音楽的特性と関連が見られた。しかし対人的特性を活かした英語学習法と対人的特性は関連がなかった。第Ⅶ章（研究3）では、語彙学習法に焦点を当て、6回の授業の最初に6種類の語彙学習法を1回ずつ取り入れ、各授業の最後に意味を確認する10問の語彙テストを行い、定着率を確認し、学習者の特性との関連を検討する実験授業を行った。その結果、特性によって定着率が高い語彙学習法と低い語彙学習法があることが分かった。例えば、接頭辞や接尾辞の解説によって語彙指導を進めた場合、言語的特性、論理数学的特性、内省的特性が高い学習者の結果が高かった。ペアで問題を出し合った後に行った語彙テストでは、言語的特性、論理数学的特性、音楽的特性が高い学習者に効果があったが、対人的特性が高い学習者には効果がみられなかった。第Ⅷ章（研究4）では、中学生の英語語彙学習方略を測る質問紙を検討し、①イメージ化・関連づけ因子、②繰り返し作業因子、③単語分類重視因子、④単語カード活用因子、⑤文脈重視因子、⑥語彙使用因子を抽出した。さらに語彙学習方略の男女差と学年差を検討した。第Ⅸ章（研究5）では、語彙学習方略と学習者の特性との関連を検討した。各語彙学習方略と言語的特性との関連、「イメージ化・関連付け」と空間的特性、内省的特性、博物的特性との関連や、「単語分類重視」と論理数学的特性、「文脈重視」と論理数学的特性、内省的特性、博物的特性との関連などが明らかになった。第Ⅹ章（研究6）では、6つの語彙学習方略の中の代表的な方略を実験的にを行い、語彙学習方略にもとづく指導方法の効果および指導方法に対する意欲と学習者の特性との関連の検討を検討した。「イメージ化・関連付け」は語彙テストおよび意欲において論理数学的特性との関連があり、「繰り返し作業」はテストでは論理数学的特性と、意欲では身体運動的特性との関連があるなど、学習者の特性と授業後の語彙テストや意欲との関連が見られた。

第三部 研究の総括（第Ⅺ章 結論）

これまでの研究結果を整理し、学習者の特性と語彙指導法との関連をまとめて述べた。本研究は、教師が直感的もしくは経験的に効果があると考えてきた指導法から、心理学的な根拠を踏まえた実証的な指導法への第一歩と言える。今後は、より多様な語彙学習法をより多様な学習者に対して処遇していくことにより、本研究の結果を補完していくことが必要といえる。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、多重知能理論を踏まえた中学生の特性と英語語彙学習方略の関係について、6つの研究から検討を行ったものである。中学生の特性を測る尺度と、英語語彙学習方略に関する尺度について妥当性と信頼性を確認し、これらを用いて関連を検討した。また中学生に対して実験授業を2回行い、学習者の特性と指導方法後のテスト得点およびそれに対する意欲との関連を検討していることに特徴がある。実験授業の対象者が少ないことや各指導方法が1回しか行われていないために、一貫した関連性が見られていないなどの問題点はあるものの、日本の英語教育においてあまり体系的な語彙指導が行われていない現状の中で、中学生を対象に語彙学習方略にもとづく指導を実際に行い、中学生の特性と語彙学習方略との関連を検討した点は評価できる。

第1回の審査会は2014年11月21日18時に行われた。中学生の英語語彙指導に焦点を当てている点、複数回にわたり実験授業を行っている点などが、独自の点として認められた。ただし、各研究の関連が読み取りにくいと、本論全体の構成について第一部で概要を述べること、用

語の使用の不統一や、説明が足りない部分が見られること、統計的分析が不足していることが指摘され、修正が求められた。

第2回目の審査会は2015年1月9日18時15分に行われた。第1回目の指摘の大部分が修正されたと認められたが、さらに本論の構成について図を用いて示すこと、議論の飛躍があるところなどが見られるので研究結果に基づき正確に記述することなどの点が指摘された。

第3回目の公開審査会は2015年2月13日18時に行われた。これまでの修正要求を含めて修正を行った上で論文の発表を行い、質疑に対しても適切に回答がなされた。最終試験では学力の確認がなされた上で、引用文献の表記の修正と誤字などの修正が求められ、それは主査に一任された。その修正がなされることとして、博士論文として合格と認められた。